「十九歳の小学生」を読んで

泉崎第二小学校四年　三村さん

私がこの本を図書館でかりた理由は、なぜ十九歳なのに小学生なんだろう、と不思議に思ったからです。読む前は、まずしい国の女の子が学校に行く事ができないという内容なのかな、と勝手に思いこんでいました。でも、読み進めていくと、全くちがう内容で、想像していたよりも悲しい気持ちになりました。この本は、カンボジアのプノンペンという町のペン・ポンナレットさんという人のお話です。ポンナレットさんは、私と同じ十歳のときに、戦争で家族を失い、一人ぼっちになってしまいました。身よりのないポンナレットさんは、しせつに入ることになりましたが、そこでいじめられてしまいました。私がポンナレットさんと同じ立場だったら、悲しくて心がはりさけそうです。一人で生きていけないな、お父さんお母さんに会いたいな、と考えると思います。カンボジアの戦争は、六年も続き、国民の半分以上が命を落としたそうです。こんな残こくな戦争が、実さいに起き

ていたことは、この本を読んで初めて知りました。とても悲しくて、いかりがこみ上げてきます。私達が生きている今、また戦争をくりかえしているという事は、ぜっ対にやってはいけない事です。悲しい戦争をくりかえして、ポンナレットさんのような人をふやしてはいけません。

ポンナレットさんは、毎日ご飯が食べられて、おふろに入って、ふつうの生活を送ることができるように、十六歳で初めて日本にやってきました。そして、神奈川県の小学校の児童として六歳も歳のはなれた子達と、じゅ業を受けるようになりました。私は、あんなに苦しい思いから立ち直って学校に行くなんて、とても心が強いなと思いました。私だったら、またいじめられるんじゃないかな、と思って、小学校に通うことはできないと思います。ポンナレットさんは、日本で一生けん命読み書きの勉強をして、三年後に小学校を卒業します。その後は、働きながら中学校に

通い、現在は結こんし、子どもをうんで、お母さんになりました。ポンナレットさんは今でも、学べるという事に感しゃしているそうです。

私が一番心に残っているのは、ポンナレットさんの「人間の命はみな平等」という言葉です。理由は、どうして命はみんな同じなのに、戦争でかんたんに人の命をうばったり、弱い者いじめをしたりするのかな、と思ったからです。学校でも「一回でも命を落としたら、もうどこに行っても買えません」と習いました。命の大切さを、世界中の人がもっと考えてくれたら、戦争やいじめはなくなると思います。

私は、この本を読んで、人間はみな平等である事、自由である事、また、色々な事じょうで学ぶことができない子どもが世界中にはたくさんいるという事を学びました。そして、私達のように学べることは、とても幸せだという事に気がつくことができました。